

魔法と復讐の物語

叡智あい

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

徐々に光が薄明るくなり、漸く朝が訪れる時、広大な山脈に囲まれた小さな村はまだ眠っていた。

目次

第1話

徐々に光が薄明るくなり、漸く朝が訪れる時、広大な山脈に囲まれた小さな村はまだ眠っていた。

「私は目を覚ました。空が白み始めているのに気が付いたからだ。しかし隣で寝ていたはずの夫の姿は見えなかった。そして……私の傍には小さな赤子が一人眠っているだけだったのだ。」

「私はすぐに我が子を抱き上げ家の外に出た。すると外では大勢の村人達が何かを取り囲んでいた。」

「その光景を見た瞬間、私は全てを悟った。夫がどうなったのかを。」

「夫は死んでいた。全身から血を流して、無残な姿で……。」

「そうして私は思い知った。この世は弱肉強食なのだ。弱い者は強い者に喰われるしかないのだと言うことを。」

「それから私は誓った。我が子を必ず強く育て上げる事を。何者にも負けない強さを身に付けさせてみせると。」

「だから私は旅に出た。世界中のあらゆる場所に足を運んだ。時には命の危険に晒される事もあったが、それでも構わなかった。」

「そして私は遂に見つけた。最強の力を手に入れる方法を。」

「それが魔法だった。」

「魔法を使えば誰でも強くなる事が出来る。私はそれを知った時、迷う事なく魔導の道に進んだ。」

「しかしそんな私の前に現れたのは、一人の少年だった。まだ幼さが残る子供だったが、彼は恐ろしく強かった。剣の腕もそうだが、一番凄かったのはその精神だ。彼はどんな逆境に立たされても決して諦めたりしなかった。最後まで希望を捨てず戦い続けたんだ。」

「その姿を目の当たりにした時、私は確信したよ。彼こそ私が探し求めていた理想の男性だとね。」

「だからこそ私は決めたんだ。彼の子供を産もうって。」

「そしてその子供が今ここにいる。この国の王として君臨している。これ程までに素晴らしい事があるだろうか?」

「いや無い!断言しよう!今の私は世界一幸せな女だと!」

「私は自分の幸せの為になら何でもする。例えそれが神を敵に回す行為であったとしてもだ!!」

「その為にまず邪魔な奴らを始末しなくてはならん。だが安心してくれ。お前だけは殺さないでおいてやる。大切な息子である事に違いは無いからな。それに……………お前のお陰で、この国を守る為に必要な人材を集める事が出来た。感謝しているぞ、セクト。」

ルウはそう言うのと俺の頬を撫でてくる。

俺はそんな彼女の手を払い除けると、ゆつくりと立ち上がった。

「ふざけんなっ!! 俺だってこんな国に未練なんかねえよ! 親父のせいでどれだけ辛い思いをしてきたと思ってる!? 母さんが死んだ後もずっと馬鹿みたいに酒ばっか飲んで、拳句の果てには母さんの遺品を売り払おうとしたり! あんな最低な男なんて死ねばいいと思っただ事は何度もある! でも……………どうしても出来なかつたんだよ! 俺にとつてたつた一人の家族なんだ! それを簡単に捨てられるわけがないだろ!」

「ほう? ならば何故今まで我慢していたのだ?」

「それは……………親父の気持ちがあつただけわかつたからだ! 俺と同じ境遇なのに頑張ってる人達を見てたら、俺だけが楽になろうとする自分が許せなくなつたんだ! だけでももうそれも終わりだ! 俺は絶対に復讐してやる! あの糞野郎どもに地獄を見せてやる! そして死んで詫びさせてやる!」

「ククツ……………なるほどなあ。つまりお前も結局は同じ穴のムジナだつたという訳か。」

「ああっ!」

「フハハッ! 何とも浅ましいものだな。まあいいだろう。せいぜい頑張るがいいさ。私としてはお前のような雑魚など最初から眼中に無い。せいぜい足掻いてみせてくれ。」

「言われなくてもやってやるよ! 見てやがれ、クソババア!」

「おいっ! 誰がクソババアじゃと!」 「ぐええっ!」

いきなり背中強い衝撃を受け前に倒れ込む。

振り向くとそこにはエクリアがいた。

「痛ててててて……」

「ちよつと、大丈夫かい？ まったく、あんたはどうしてこうもバカなのかねえ。」

「仕方ないだろ、考え事してたんだから……」

「ふん、言い訳とは見苦しいのう。」

「うっさい、黙れ。」

「はあく……なんだい、その態度は。せっかく心配してやったつていうのに。」

「はいはい、ありがとうございますー。」

「なんじゃその言い方は。本当に腹立たしい小僧じゃの。」

「うるせー、こっちは色々考えて疲れてんだ。ほつとけ。」

「何を言っておるか。貴様ごときに考える事なぞ必要ないわい。」

「おいコラ、喧嘩売ってんのか。」

「当然じゃろうが。」

「よし、表出ろ。ぶっ飛ばしてやる。」

「望むところじゃ。返り討ちにしてくれるわ。」

そうして睨み合っていると、ルウが大きな声で笑い出した。

「ふははははははっ！ 相変わらず仲が良いな、お前たちは。」

「どこがだよ。」

「こんな奴、別に仲良くないわい。」

「息ぴったりじゃないか。」

「「違っっ!!」」

「うむうん、やはり親子だな。」

「「だから違っっつての!!」」

「はいはい、そういうことしておくよ。」

「まったく、なんで俺がこいつの相手しなきゃいけないんだ。」

「それはこちらの言葉じゃ。」

「あ、そうだ。ところで話は変わるけど、この前話したアレ、どうなった?」

「ああ、それならちゃんと用意してあるぞ。ほら、受け取れ。」

そう言うと、彼女は俺に小さな箱を手渡してきた。

「おお、マジか。サンキュー。」

「礼には及ばんさ。」

早速開けてみると中には指輪が入っていた。

「綺麗だな。これってまさか……」

「勿論婚約指輪だ。ちなみに私とお揃いのデザインだぞ。」

「へえ、そうなんだ。」

「……………」

「……………」

「……………それだけか？」

「え？ 他に何かある？」

「はあ、全く……お前という奴は。」

ルウは呆れた様子で溜息を吐いた。

「そんな事より、早く嵌めてくれよ。」

「ま、待て。今ここでするのか!？」

「当たり前じゃん。」

「そ、そうか。では、いくぞ……。」

ルウは緊張気味に俺の手を取ると、薬指にゆつくりと指輪を通した。

「これでよし、と……。」

俺は左手の甲を掲げて眺める。

すると、何故か急に涙が出てきた。

「え……あれ……う……おかしいな……どうして……泣いてるんだろ

……全然止まらない……何なんだ……この感じ……一体何なんだよ

……ちくしょう……!」

「セクト……?」

「ぐすつ……いぐずつ……い……俺さ、実はずっと不安だったんだ。

いつか親父が母さんの事を忘れて、新しい女を作るんじゃないかって。」

「……………セクト……………」

「でも違ったんだな。親父は母さんの事、ずっと愛してくれてたんだ。俺のことだって大切に思ってたくれたんだ。それがわかって……す

ごく嬉しくて……」

「……」

「こんな嬉しいこと、生まれて初めてだ。ありがとな、父さん。」
「セクト……。」

「なあ、一つだけ頼みがあるんだけどいいか？」

「ん？ 何だい？」

「これからも父さんって呼んでいいかな？」

「もちろんだとも！ お前は父さんの子なんだから！」

「良かった。ありがとう。父さん。」

俺は溢れる涙をそのままに、精一杯の笑顔を浮かべた。

「セクト、こつちに来るんじや。」

「ん？ 何だよ、いきなり。」

「良いから早うせい！」

「わかったよ。」

俺は言われるままにエクリアの隣に立つ。

「目を瞑れ。」

「はあ？ どうして……」

「良いから閉じろと言うておろうがっ!!」

「はいはい、わかりましたよ。」

渋々目を閉じる。その直後——唇に柔らかいものが触れた。